

ポータルシステムはすでに公開しており、学生からは「わかりやすくなった」「デザインがきれい」など好意的な反応をもらっています。詳細な効果測定はこれからですが、アクセス数も増えているとみています。

——tsuzumiの活用計画についても教えてください。



ポータルシステム「@CAMPUS」。大切なお知らせを見つけやすくするなど、使い勝手を向上させた



生成AI「tsuzumi」の活用で、教員は研究と教育をより効率的に両立できるようになる



リアルなキャンパスとして設置された新宿駅前キャンパス。ほかに大阪、名古屋にもキャンパスがある

◎上記ソリューション導入時期は2025年8月です。
◎文中に記載の組織名・所属・肩書き・取材内容などは、全て取材時点のものです。
◎上記事例はあくまでも一例であり、すべてのお客さまについて同様の効果があることを保証するものではありません。

■ご導入いただいたサービスについて詳しくは

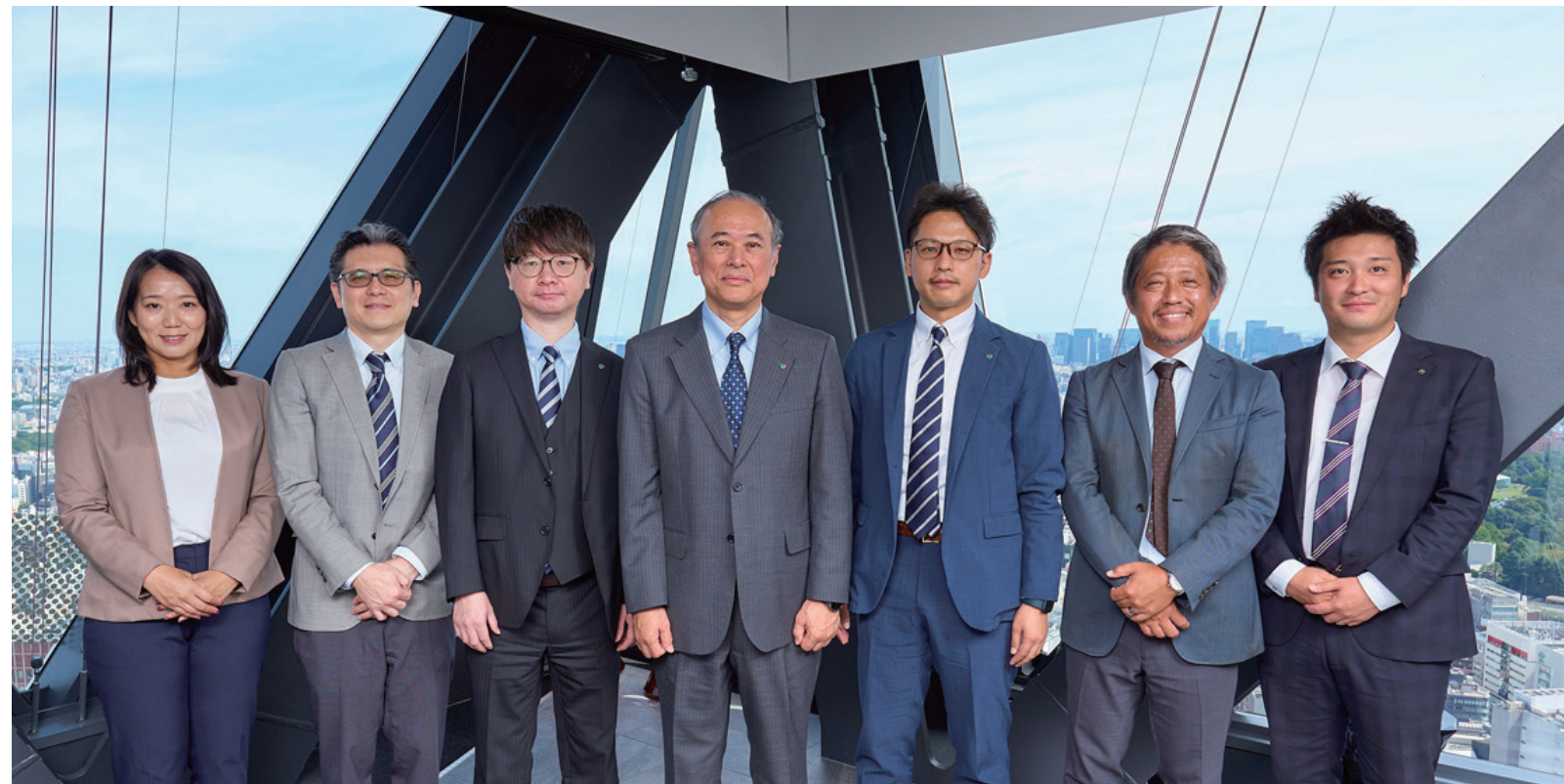
基盤システム更改、NTT版大規模言語モデル「tsuzumi」

<https://business.ntt-east.co.jp/content/education/university/#sec-ctg-infra>



通信制大学が基盤更改と生成AI導入で学びを変革

東京通信大学



(左から) NTT東日本株式会社 ビジネスイノベーション本部 先進事業推進部 事業協創部門 賀川、SE運営部 技術部門 チーフ 小南、東京通信大学 管理部 宮崎氏、情報マネジメント学部 学部長 加藤氏、統轄責任者 佐藤氏、NTT東日本株式会社 ビジネスイノベーション本部 社会基盤ビジネス部 教育営業部門 第二教育営業担当 担当課長 今井、シニアコンサルタント 鈴木

☑ 導入いただいたソリューション

基盤システム更改、NTT版大規模言語モデル「tsuzumi」

☑ ソリューション導入効果

- 学生数倍増後も安定稼働する24時間365日止まらない学習環境を整備できた
- ポータルシステム刷新により、学生が集うオンラインキャンパスの土台を構築できた
- 生成AI「tsuzumi」の導入で、次世代の個別最適な学習支援を推進する準備ができた

☑ NTT東日本選定のポイント

- 大学運営への知見があり、業務の本質を捉えた提案をしてくれたこと
- データセンターを保有しており、高いセキュリティと事業継続性を提供できること
- 基盤システム構築から生成AI導入、ベンダー調整まで幅広く対応できる総合力があること

ポータルシステムやLMS刷新で学生数倍増に対応 生成AIで次世代学習支援を始動

東京通信大学は、学生数倍増に対応するため、基盤システムの全面更改をNTT東日本へ依頼。24時間365日止まらない学習環境の構築と、生成AI「tsuzumi」による個別最適な学習支援を始動しました。



東京通信大学

業 種 教育、学習支援

学生数 6,151名 (2025年4月1日時点)

DX人材育成のため情報系学部を4000名規模に拡大 基盤システム更改と生成AI導入を決断

——今回基盤システムを更改することになった背景や、解決したかった課題について教えてください。

佐藤氏：本学は、社会課題として深刻化している高度IT人材やDX人材、福祉人材の不足を解消することを目的に2018年に開学しました。情報マネジメント学部と人間福祉学部を立ち上げ、人材育成に取り組んでいます。学生数は順調に増えていますが、とくに不足しているIT人材は今後さらに増やしていく必要があると考え、情報マネジメント学部の収容定員を2000名から4000名規模にしていく計画を立てたことが更改のきっかけです。

通信制大学にとって、ポータルシステムやLMS (Learning Management System／学習管理システム) は通学制大学のキャンパスに相当しますから、学生数の増加によるアクセス集中にも対応できるよう、きちんと整備しておく必要がありました。また、開学から数年が経過し、学生や教職員からUI (画面デザイン) やUX (使い勝手) への改善要望が挙がってきていたので、できるだけ反映することを意識しました。

——NTT東日本にご依頼いただいた理由を教えてください。

佐藤氏：特に評価したのは、大学運営を深く理解した上での提案力です。システムありきではなく、学生の学修環境や教職員の業務に寄り添った解決策を提示してくれました。通信制大学にはインターネットを介して全国から学生がアクセスするので、セキュリティや事業継続性は極めて重要です。NTT東日本はデータセンターを自社で保有しているのも安心感につながりました。また、NTT東日本は2018年の開学当初からのパートナーですが、通信制大学がまだ少ない時期から、他大学の事例も踏まえて知見を提供してくれており、非常に頼りになります。

——生成AI「tsuzumi」も導入されていますが、背景を教えてください。

加藤氏：生成AIは通信制大学との親和性が非常に高く、学生へのメリットも大きいと考えています。これからの時代、企業でも生成AIの活用がどんどん進みます。ぜひ、学生には在学中に積極的に生成AIに触れ、使い方や知識を身につけて卒業してほしいと思っています。また、教員が研究で機微な情報を扱う場合も多くあります。そのため、情報の安全性を確保できるローカル環境で稼働する生成AIを導入することで、安心して研究や教育支援に活用できると判断しました。

学生本位の視点で要件を整理 大規模で複雑なプロジェクトを着実に推進

——今回は大学・高専機能強化支援事業も活用し、かなり大規模なプロジェクトでした。進める上で重視したポイントがありますか。

佐藤氏：複数のプロジェクトを並行して進めるにあたり、大事にしたのは学生本位の視点です。限られた予算の中で多くの要望に対応する必要がありましたが、「本当に学生のためになるのか」を常に問いながら要件の優先順位を決め、学生にとって価値のある機能を厳選しました。

宮寄氏：NTT東日本は開学当初から基盤システムの運用保守を担当しているので、背景をよく理解してくれており、一から説明する必要がなかったのもその点はスムーズでした。

——実際の更改作業はどのように進めましたか。

宮寄氏：最も苦労したのはポータルシステム「@CAMPUS (アットキャンパス)」の刷新でした。大学からのお知らせ配信や証明書発行、LMSへの遷移など多くの機能があるものの、学生が日常的にアクセスする真の玄関口になりきれていなかったと思います。学習自体はLMSのスマートフォン向けアプリで完結してしまうため、必ずしもポータルシステムにアクセスする必要がありませんでした。

まずは学内でブレインストーミングを重ねました。学生アンケートやキャンパス・サポートセンターへの問い合わせも参考にしながら要件を固め、NTT東日本にはそれをベースにアプリベンダーとの橋渡し役を担ってもらいました。その際、私たちの要望を表面的に捉えるのではなく、背景まで理解し、ときには「こうしたほうがよいのでは？」と提案しながらアプリベンダーとの調整を進めてくれたのがありがたかったです。

LMSについては、レスポンス改善のためにソフトウェアの構成を見直しました。NTT東日本は要件とコストのバランスを考慮した複数の選択肢を提示してくれたので、検討しやすく助かりました。

——生成AI「tsuzumi」に関しては連携協定を締結し、日本初の教育現場への導入です。具体的にどのように進めていますか。

加藤氏：まずは、学生・教員・職員、それぞれの立場でどのように生成AIを活用できるか、ユースケースの検討から始めています。学生向けには「教えないAI」というコンセプトを重視しています。通常は生成AIに質問したらすぐに答えがほしいですが、教育的観点からは、すぐに答えを教えないほうが学習効果は高いとされます。また、通信制大学の特性上、夜中に学習する学生や海外在住者も多くいます。tsuzumiに24時間いつでも質問でき、リアルタイムで学習サポートを受けられる環境が整えば、学習を進めやすくなり、学びの継続性が高まり、理解も深まることが期待できます。

教員向けには、授業スライドや小テスト問題作成の支援などを考えています。現在、1単位あたり100問以上の問題を手作業で作成していますが、このような作業をtsuzumiが支援できれば大幅な負担軽減になり、その分、教育・研究の質の向上にあてられる点も大きなメリットです。さらに、職員向けには、学生からの問い合わせ対応や企画・広報業務の効率化などを想定しています。利用シーンによって応答をカスタマイズする必要があるため、NTT東日本と密に連携しながら進めています。

24時間止まらない学習環境を実現 生成AIで究極のアダプティブラーニングへ

——基盤システム更改が完了し、どのような効果が出ていますか。

宮寄氏：LMSでは、24時間365日いつでも学習できる環境を整備できました。構成を冗長化することで、年に約4回の定期メンテナンスのためのシステム停止がなくなり、学生がアクセスできる状態を保ちつつ、新しい機能のリリースや改修も行えるようになっていきます。アクセスすると「現在〇人の方が一緒に学習しています」といったメッセージを表示させ、オンラインでもほかの学生とともに学んでいる連帯感を演出する工夫も取り入れました。